

イカロスの翼は死に戻る

玄武 水滸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気がつけば――――はイカロスとなっていた。それも女になつて。

昔の記憶が思い出せないイカロスはラビリンス内を歩き始めて――そして迷宮に眠る怪物に殺される。

殺される間際、生きたいと傲慢にも願ってしまった。

それがイカロスの傲慢との戦いの始まりの幕を開けた。

# 目次

## 生前編

傲慢な怪物	1
死に戻り機関	7
救われることの無い物語	13
殺されなかった怪物	20
もしそれが怪物の所為ではないとしても	28
そしてその復讐は燃え盛る	33
後書きと伏線の解説(?)	38
FGO日常編	
わんわんお	41
しろくろジャンヌ	46
イカロスの炎	51
オケアノス編	
レイシフト	55
テーセウス	58
森を進む	63

## 生前編 傲慢な怪物

ーここに語ろう。

背中の一対の翼で天へと、高みへと望んだ一人の話を。

それは即ち傲慢の象徴。

後世にも語り継がれる人類史上初めて大空へと羽ばたいた罪深き  
傲慢少女の話。

1

「おい、何ぼーっとしているイカロス！」

気がつけば毛深いおじさんに怒鳴られていました。

え、ここどこ？そもそも俺は確かーだめだ、思い出せない。大切な事を思い出しそうになると、割れる様に頭が痛む。まるで何かに鍵を付けられている様な感覚。

とりあえず落ち着こうと、一人胸を抑えようとして違和感を感じた。

むにゅんという感覚。視線を下に向けてみれば、たわわと実るおつ「イカロス！」

怒鳴られて背筋を思わず伸ばす。慌てて返事をしようとして、声が

出せない事に気がついた。

「無理して喋らんでもいい……全くミーノース王め。わしが何をしたと言うんだ」

ミーノース王？はて、そんな人は聞いた事がないぞ。

そもそもここは一体何処なのだ。石畳が広がると思えば天井は無かったり。空からは太陽の光が降り注ぐ。ベージュ色の長い髪に当たって中々暑い。

記憶はないものの、知識だけは残っている感じだ。おじさんの喋っている言葉は聞いた事がないが、理解する事が出来た。勿論喋れと言われたら話せるかは謎だが。

立とうとして見れば、足にはずっしりとした鎖が付いていた。鎖は俺の足と足の間に繋がっていた。こう言うのには詳しくないのだが、これにどの様な意味があるのだろうか。

「よし、イカロス。このラビリンス内に落ちている羽を集めてくるんだ。それで翼を作って、空から逃げてみせよう！」

「……!!」

飛べるわけないだろ！という声は出ず、代わりに<sup>くろす</sup>黝んだ血反吐が使い物にならない喉から飛び出た。

慌てておじさんが背中をさすってくれる。どうやらあまりこの体の状態は良くないらしい。よくよく見れば、足や腕に痣が多い。それに着ているのも薄汚れた布切れ一枚。

「……あ」

喉が痛い。鉄臭い喉から声を捻り出し、やっと小さいながらも声が出た。

「だい……じょうぶ」

「よし。わしは羽を蟬で繋げる準備をしておくから、羽をある程度持ってきたら帰ってきてくれ」

声を出すと喉が痛むので、とりあえず親指を立てて了承のサインを出す、俺は石畳の地面をゆっくりと蹴って歩き始めた。

そしてその直後に腹の中にあるものを全て吐いた。

私は、いや俺は知っている。俺がこの後どの様な運命を辿るのかを。思い出そうとすると痛む頭をさすりながら、奥深くに眠る一つの知識を見つけた。

それは『イカロスの翼』と言う神話。

ミノタウルスを閉じ込めたラビリンスを伝説の石工　ダイダロスの娘　アリアドネーによって助けられる。本来生贄として死ぬはずだったテーセウスが帰還した事にミーノース王は不審に思った。まさかアリアドネーにその様な知恵があるとは思わなかったのである。そして疑われたのがラビリンスの作成者であるダイダロスだった。そしてダイダロスは息子のイカロスと共にラビリン스에閉じ込められてしまう。

要するにイカロスは完璧なとぼちりを受けたのだ。

ダイダロスはなんとか脱出しようと策を練る。その内に思いついたのが羽を蠟でくっ付けて翼を作り、天へと羽ばたいて脱出すると言うものだった。

作戦は成功し、ダイダロスとイカロスはラビリンスから脱出する事に成功する。

だが、そこで調子に乗ったイカロスは太陽に更に近づこうとし、やがて蠟が溶けて地面へと落ちていき……死ぬという物語だ。

俺はそこまで思い出し、自分がイカロスと同じ運命を辿るのではないかと思った。明確な死の気配がそこまで来ている。

動悸が早まる。走ってもいないのに息切れを起こし、立っているのさえ辛くなる。

いや、まだ分からないだろうか？自分はイカロスと言われたが女だ。ダイダロスは息子と一緒に幽閉されたはず。だとしたら別な未来が見えるのではないだろうか。

そう思ったのも束の間。突如として視点がぐらりと傾いたかと思



「おい、何ぼーつとしているイカロス！」

怒鳴り声と共に意識が覚醒した。俺は確かと思い出そうとしてー腹の中にあるものを全て吐き出した。

「だ、大丈夫かイカロス!？」

足がある。ただいつも通りな事なのに、それが恐怖として体に纏わり付いた。

背中をさすってくれるおじさんーダイダロスに大丈夫だとサインを送る。

大丈夫などではなかった。手足は震え、思考は恐怖で埋め尽くされた。

先ほど起こった事を夢とは言いたくなかった。痛みも全身を走つたし、何よりこうして自分がここにいることがその証拠だ。でも何故という疑問がぽつりぽつりと浮かび始めた。

夢というよりは時間が戻った様に感じる。まあ夢だろうと何だろうと、同じ事をすれば待っているのは死だ。

ダイダロスは先ほどー週目という名前を付けようか。記憶の整理にも役に立ちそうだーと同じ事を言い、私に羽を拾ってくる様に命じた。

とりあえず先ほどと同じ様に立ち止まったりなんかすれば、私は何者かによつて殺されるだろう。バタフライエフアウトと言う様に、つぶさな事でも変えれば何かが変わるかもしれない。

まずは翼を携えて飛んでみよう。何かが変わるかもしれない。身は震えているものの、ここで止まって拷問の様には殺されるのは嫌だ。

そして意気込んでいた私の頭は宙を舞った。



そして傲慢にも生きたいと願ってしまった。

1

3 周目

「おい、何ぼーっとしているイカロス！」

拷問の様な長い長い時間が幕を開ける。

## 死に戻り機関

### 3 周目

俺がこれまで経験した死は必ずしも無駄になるとは限らない。寧ろ必要不可欠だとさえ思えてくる。だけれども死ぬのは怖い。何かで切り裂かれるのはもう嫌だ。

そんな自分がとつた行動は一つだった。

「お、おいイカロス！手を引つ張るな！」

二回の死はどちらともここら辺で起きている。だとしたら私の身体を切り裂いた本人はここへと近づいている事になる。となればやつが来た方向とは真逆に走ればある程度話は進むかもしれない。無残に体が二つになる事も無いかもしれない。

ズキズキとした足に叱咤激励しつつ、石畳のラビリンスをダイダロスの手を引つ張つて走る。だがそれはダイダロスも同じだったのか、無理に走らせた結果ダイダロスは躓いた。

痛がるダイダロスを起こそうとして、脅威と目が合う。

「あ……」

怪物の持っていた戦斧が振るわれ、ダイダロスの腰下から血が噴き出した。倒れていたダイダロスの瞳からはみるみるうちに生氣が失われていき、俺の手を握っていた手も力無く落ちた。

その姿は正に化け物だった。巨躯な体、その頭からは天すらも貫いてしまいそうな角が隆々として聳え立っていた。牛の名残なのかは分からないが、頭からは生える白い毛は腰辺りまで伸びている。そして両手にはミノタウルの武器であろう人一人分ぐらいありそうな戦斧が握られていた。

理性の無い瞳に見つめられた時、本能的に死を悟った。血走った目はこちらを見据えている。今から逃げようにも間に合わない。

そして凄まじいスピードで振るわれた戦斧は、私の視界を二つに割いた。

#### 4 周目

ダイダロスの定型文と共に意識が覚醒した。すぐ様ダイダロスを立てさせて走り始める。今度は無理させない様に。

「どうしたんだイカロス!」

聞いてくるダイダロスを見無視しながらラビリンスを走る。

背後から追ってくる気配は無く、うまく逃げきれたのではないかと内心安心する。

「何が何だか分からんが、そこを左に曲がった所に小さな窪みがある。そこで休もう」

何を言っているんだと思う。が、よくよく考えてみればこのラビリンスを作ったのはこのダイダロスだ。設計図が頭に入っているかは分からないが、信用に値すると思う。なんせ伝説の石工とまで言われた男だ。それに私、イカロスの自慢の父親だ。信じなくてどうする。右左に別れる道に出た。そこをダイダロスの言う通りに左に曲がる。

そして左に曲がった直後、行き止まりに当たった。

ダイダロスの方を見ると、首を傾げている。一体どうしたと言うのか。

彼はカッと目を見開くと俺の方を向いた。

「悪い、道間違えた」

殺すぞクソ親父。

そして脅威が迫る。

## 8周目

あの後ぶった切られた俺は、またもや左というバカ親父に蹴りを入れつつなんとか休める様な場所にまでついた。

ダイダロスは犬歯で指の表面を小さく切り、壁に地図を書き始めた。

そして書き始めた所で怪物と出会い、無残にも死んだ。

地図を書くとき現れる怪物を何とか撒きつつ、地図を書かせた。

だが、地図が完成すると書かれていた壁を壊して怪物がやって来た。そしてまたもや殺される。

5、6周目で書かせた地図は7周目でバラバラにされ、俺の体もバラバラにされた。

そして8周目が始まる。

定型文から始まり、何とか窪みまで来れた俺は考えていた。

地図が無いと逃げる時に困る。もう行き止まりに当たって絶望を感じて涙と糞尿でグジョグジョになった自分は怪物と言えど見て欲しくない。若干戦斧を振るう勢いが落ちていたのは気のせいだろう。

では地図をどこに書かせるか。床か、それともまた別な所か。

そこで俺は気がついた。というか何故気がつかなかったのかと自分を殴りたくなった。

怪物 ミノタウルスがどうして生きているか？だ。

ミノタウルスはテーセウスによって倒されているはずだ。となればあの追って来たのは何だ？いや、あれは間違いなくミノタウルスだ。だとしたらテーセウスがやられたと言うのか。でもそうならばダイダロスとイカロスがラビリンスに幽閉された理由が分からない。

「おいイカロス！どうして俺を走らせる!?なんか理由があるなら言ってみろ！」

怪物からお前を逃がすためだ！と叫びそうになるのを堪え、そこで俺はふと思った。

「おとうさん、かいぶつ……みてないの？」

「怪物？あれか、アステリオスの事か？それならもう退治されたんだろ？」

ダイダロスが嘘を言う必要はない。となればダイダロスはミノタウルスを見ていない……？

そこで俺は気がついた。それならば全ての事に辻褄が合う。もしかしたらと言うだけなのに、俺の口角は三日月の様に歪んだ。

まず1周目。現在の方向とは逆の方向に走って死亡。2周目も以下同文。

3周目、ダイダロスが途中で転んで死亡。

4周目、行き止まりに当たって死亡。

5、6周目は地図を書いてる途中、逃げ道を模索しながら死んだ。そして7周目。地図を書き終えたら死んだ。

最初はミノタウルス自体が地図を書かれるのを嫌がって殺したのかと思った。だけれども地図を書く事が間違いという解釈をすれば全ての辻褄が合うのだ。

ミノタウルスの出現条件はたった一つ。自分達が間違った道に進んだ時だ。

逆の方向に進んだから現れた。

ダイダロスを怪我させたから現れた。

道が違うから現れた。

地図が必要ないから現れた！

全てに辻褄が合い、電撃の様な物が全身を走る。笑いがこみ上げて来た。どうしようもない笑いが口から溢れる。

これでラビリンスから脱出する事が出来る！私は神話通りに飛び立てるんだ！

そして、脅威が迫る。

## 9 周目

……何故ミノタウルスが現れた……？分からない。どうして殺されたのか。まだ俺は行動を始めていなかった筈だ。もしかして慢心するなって事か？

自分の立てた仮定が揺らいでいる様に思えた。もしかしたらミノタウルスが現れる条件には他に理由が？それともただ単に偶々ミノタウルスの巡回ルートに俺らが当たっただけなのか。

物事が色々と不明瞭過ぎる。8周目の死だけが合わない。いや、もう一度照合すれば合うのではないだろうか？

それともミノタウルスが現れる条件が二つある……？そう考えるのが楽だが、もう一つの条件に関しては思い当たる節がない。

とりあえず今までの経験を踏まえて前回の所まで移動しよう。

と言ってもだ。大した距離じゃない。走って2分も掛からない。こんなに小さい場所で死んでいたのか。あの巨大な怪物を閉じ込めておくラビリンスがまさか小さいわけが無い。

そこまで考えて俺は絶望した。一体俺は後何回死ねば良いんだ。私は何回死ねば天へと羽ばたけるのだ!? 誰もその問いには答えてくれない。だが、どうしようもない恐怖だけが俺の肩に手を置いていた。

間違えれば死ぬ。間違えなくても何かしらの条件で死ぬ。

まずは進む事が先決だ。進んでいればそのうち分かるだろう。

私はお父さんの手を引っ張って立ち上がった。

そして直後、大振りに振るわれた戦斧によって体は塵の様に吹き飛んだ。

## 救われることの無い物語

### 10 周目

何時もの通りにダイダロスの腕を引っ張って走りながら、俺は考えていた。

9 周目、どうして自分が死んだのか。もう少しでその理由が分かる気がする。時間経過？いや違う。してはいけないことをしたか？いや違う。

答えは自我の交差だ。簡単に言えば、自分が自分ではなくなった時にミノタウルスは現れると推測した。

生憎如何してか名前は思い出せないが、俺はイカロスではない。イカロスではない何かがある知識を使ってラビリンスを歩いているのが現状だ。もちろん神話上にイカロスがどのような道順で歩いているかなどは書いてない。例えばガイドマップ宜しくその様に書いてあったとしても覚えている自信はない。

先程から薄々自分でも気がついていたが、時々イカロスとしての心情が流れ込んでくる。この体が大空に羽ばたきたいと叫ぶのだ。天へと近づきたいと。

その意識に流されて、俺がイカロスとなった時。それが死亡条件だと推測する。つまりラビリンス、いやミノタウルスは——のままであって欲しいのだろう。名前も思い出せず申し訳ないが。

条件が分かれば怖くない。俺は自分の意識を強く保って、俺である事をこの体に誇示させればいいのだ。

だから俺の考えるべきなのは、どうしたら空へと羽ばたけるのかではなく、どうしたらミノタウルスに遭遇しないで羽を集められるかだ。

神話にはダイダロスがどの様にして羽を集めたのかは詳しくは記載されていない。勿論俺の無知が招いた事故だったら謝る。

だから俺の仕事は羽を集めるまでだ。それ以降は別に神話通りイ



カロスで良いだろう。その後は大空へと舞って焦げるなり何なり自由にしろ。

この体は一時的に俺のものだ！

「どうしたイカロス、どこか体が痛むのか？」

イカロスと呼ばれると自我が思わずそちらの方へ引つ張られてしまう。少しずつだが、自分という存在が薄れていくのが何となく分かる。このまま時間が経てば、俺はイカロスという名の少女になってしまう。そうなればラビリンス内のミノタウルスに殺されてリスタートだ。

「だ……おとうさん。はねって……どれくらいあつめるの？」

まだ喉が痛い。その所為か上手く発音も出来ず、言葉も途切れ途切れになってしまう。

少し悩んだダイダロスは人差し指を立てて笑顔で言った。

「まあざっと100枚程度だろー！」

オイぶん殴っていいか？何が100枚程度だ。まあ人を飛ばせるレベルの翼を作る時点で量の多さは覚悟していたが、まさかそこまでとは思わなかった。五分生き残る事ですら九回も死んでいるというのに。一体いつまでラビリンス内を怯えながら散策すれば良いんだ？

「三日間ぐらい探せば集まるだろうな。イカロス行くぞー！」

三日間で100枚集まるのかよ。

とりあえずやることは決まった。ラビリンス内に落ちている羽を探す。間違った道に進めばミノタウルスが殺してくるし、死の恐怖と戦う事以外はイージーモードだな。

しかし九回も殺されているのに、やはり怖い。死ぬという事が痛みと一緒に脳裏に張り付いて離れない。ダイダロスがいなければ、俺は髪の毛を掻きむしったりして叫んでるだろう。いや、イカロスの自我が前に出てきて殺されるか。

クソ親父の大きさを改めて感じつつ、羽集めに走るとするか。

## 47 周目

日が暮れてきた。空に浮かぶ月と星を眺めながら、石畳のラビリンスに俺は寝転んでいた。もちろんどれがどの星かは分からないが。

結論から言えば、羽は30枚集める事が出来た。今はダイダロスがどこからか持ってきた蠟を使って羽をくつつけている。そこ、御都合主義とか言わない。ミノタウルスが現れないという事は、あるだけの羽をくつつける事は許可されたようだ。

しかし我ながらよく30枚もの羽を集めたと思う。道を間違える度に死に、ダイダロスが転ぶ度に死ぬ。クソ親父許さない。

そして羽の枚数更新が出来なかった時には危うく心が折れそうになった。今ではあの戦斧を見るだけで涙と震えが止まらなくなってしまった。正直あれに慣れることはないと思う。

なんやかんやあって現在に至る事が出来た俺は心身共に疲弊していた。

そう言えば余談なのだが、俺はイカロスが一体どの様な顔をしているのかを知らない。もちろんラビリンズに鏡などは無いし、水面すら存在しない。まあ不細工だろうと美少女だろうと、戦斧に切り裂かれでは全て同じだしな。

そして神話補正なのか何なのかは知らないが、喉の渇きも腹の減りもあまり無い。まあ少しずつ減ってきているのは明らかで、明日もし水が得られなかったらと思うと内心焦る。人間食料なくても水があれば生きていけるらしい。自分自身やった事は無い……はず。

「ねえ……」

「ん？なんだイカロス、もしかして本当に家に帰れるのか心配になってるのか？」

正確にはそのオンボロの翼で飛べるのかという事を聞きたかったのだが。

するとダイダロスは作業をやめて、俺の頭を笑顔で撫でた。

「大丈夫だ。俺が絶対に家に帰してやるからな」

その言葉を聞いて俺の目からは涙が溢れる。不安や恐怖をこの人はたった一言で全てを拭い去った。ダイダロスの笑顔は辛かったものの全てを包み込んでくれるようで、ミノタウルス以外で泣きたくは無かったのだが泣いてしまった。

女の身だからか涙が止まる事は無く、嗚咽がラビリンス内に響く。その間にもダイダロスは俺の背中を撫り、大丈夫の一言で落ち着かせようとしていた。単調ながらも、その言葉は力強かった。

そしてダイダロスは俺が目を瞑ったのを見ると、作業に戻って行った。

涙を拭いつつ考える。自分がどうしてイカロスになってしまったのか。どうしてイカロスがミノタウルスに襲われているのか。まだまだ不明瞭な事が多く、謎に包まれている。

だけれども、一つだけ分かった事がある。

だが、そんな事を言う前に

脅威が、迫る。

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

#### 49 周日

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

「おい！イカロス！しっかりしろ！」

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんで

……力無く笑った。そして拳を血が滲む力で握りしめた。

俺は泣くことすら出来ないのか!!泣いて少しの現実逃避すら許されないと言うのか!!!ふざけるな!

絶望?そんなものは既がない!在ろう事かこの世界、このラビリンスに住むミノタウルスは父親さえも冒涇した様なものだ!励まし、勇気付けてくれた父親さえも!俺が泣いたせいで死んだと言うのか!!!父親だって!不安だったに違いない!それでも俺を慰めてくれた!!!自分が折れてはいけなと思うって必死に俺を慰めてくれたんだ!!その父親の死に際の顔を見たか!!?ああ、酷く見るに耐えない顔をしていただろうな!!

復讐だ……!貴様らが殺した父親の分まで俺が復讐してやる!この世界に!この世界を作った神に!俺の憎悪をぶつけてやる!この身が燃え尽きようが、俺の憎悪だけはその身に刻んでやる!

覚悟しろ!俺は、イカロスは!貴様らを絶対に許さないツツツ!!!!!!

私は!!!!!!

……貴様らを許さない。

そして、脅威が

迫る。

## 殺されなかった怪物

### 87 周目

2日目ははつきり言って前日とあまり変わらない1日だった。強いて言えばダイダロスは作業をしているため、散策するのが自分1人になった事だろう。地図は必要かと言われたが、間違った所で死ぬだけだから必要ないと言った。それに地図を書いたらミノタウルスが現れそうだし。

そして一つ分かった事がある。2日目に死ぬと、1日目に戻される事だ。だから一回死ぬ度に1日目を乗り越える必要がある。だが、そこは数々の経験により一回も死ぬ事なく1日目は乗り切れるようになった。

ラビリンスには屋根がある部分があり、そこにはどうやらミノタウルスは入ってこれないらしい。拠点をそこに移動させる事も少し考えたが、集中しているダイダロスに話しかけるのは少し躊躇う。まあ入れないからと言って安全ではない事は確認済みだ。長すぎる戦斧は屋根が有ろうとも十分脅威になった。

そして今、遂に最後の3日目。ここを乗り切れば、遂に世界への復讐を成し遂げる事が出来る。こみ上げてくる笑いを抑え、俺は1人散策に向かう事にした。

もちろん最初は死んで道を覚えるところからだ。

127 周目

それを見つけたのは俺が31枚もの羽を集め終わった時だった。

曲がり角を曲がった俺は、そこで大きな血溜まりを見つけた。そして落ちている一本の短剣に壁に書かれた血文字。何語かはわからないが、不思議とその訳はするりと頭の中に入って来た。

『テーセウスは死んだ』

……神話では生贄になったテーセウスが一本の短剣を使ってミノタウルスを倒す事になっている。だが、目の前の血文字が正しいのならばテーセウスはミノタウルスに負けた事になる。

ミノタウルスが未だに存在しているのはテーセウスが負けたからなのか……？この血溜まりもテーセウスの血だと考えれば一応の辻褄が合う。落ちている一本の短剣も、テーセウスの負けた痕跡であると考えられた。

そして一本の短剣を拾ったと同時に

背後からの轟音が俺の意識を消しとばした。

128 周目



何となくこの世界が、このラビリンスが何をさせたいのかは分かっていた。

俺に求めるのはミノタウルの撃破。つまりテーセウスの短剣を使って神話を修正する事ではないだろうか。

ここで条件をもう一度見つめ直す。

ミノタウルスが現れる条件。それは俺が間違った道に進んだから。俺はそう思っていた。だけれども、間違えたのなら追いつき返すだけでも良いのではないか？

神話の修正が必要であるこのラビリンス。間違った道に進むという事は、修正不可能になってしまっているのではないか？それならば死に戻りさせる意味もある。だけどそんな簡単にリセット出来るのなら、テーセウスが勝つまでリセットしろよ俺はふと思う。

そして二つ目の条件。俺が俺ではなくなった時、ミノタウルスは俺を殺す。

そういえば、どうしてー！ー！がイカロスになってしまったのか。そこを考えていなかった。いや、今までの材料では考える事が出来なかった。でも、今ならわかる。

この世界は、このラビリンスは俺にテーセウスになって欲しかったのだろう。だからイカロスになってはいけなかった。だから短剣を拾った時に俺は殺された。だって怪物が自分を殺しにくる奴を殺すのは道理に適ってるだろう？

俺はテーセウスの短剣を拾った時点でテーセウスだった。テーセウスが死んだ所為で俺がテーセウスとしてミノタウルスを殺さなければならなくなった。テーセウス許すまじ。

やる事が明確であれば、俺の体は自然と動く。

この身は全てを踏みにじった神への復讐の為に。短剣の切っ先が自然とミノタウルスに向く。荒い鼻息を撒き散らしながら、血染めの戦斧がギリりと太陽の光を受けて光った。

今からこの身と憎悪を持ってお前を殺してやる。幾千幾万もの死を積み重ねて俺は、テーセウスはお前を殺す。覚悟しろ牛公。

そして脅威は、明確な死の雰囲気を纏って迫る。

129 周目

右振り避けた後の縦振りを避けられず死亡

130 周目

縦振りを避け、短剣で傷を作り死亡

131 周目

傷を作った後に後方に跳ねるが、血で滑って死亡

132 周目  
133 周目

349 周目

ミノタウルスも俺も心身が共に疲弊していた。  
俺の短剣によって作られた無数の切り傷からは血が溢れ、それがミノタウルスに響いていた。

刃の小さい短剣では一撃一撃が小さく、致命傷を上手く与えられない。だから手数で勝負する事にした。少しずつ少しずつ命を削り取る。小さな傷も、数が多くなる内にその効果を発揮してミノタウルスを鈍らせる。

ミノタウルスはどの周でも同じ行動をして来た。俺が右手を振りかざせば片方でガードし、もう一方で切り裂く。

だから右手を振りかざす様な仕草をすれば隙が出来る。そこを切り裂くと別な方向から戦斧が飛んでくる。だから次の周ではそれを頭に入れて戦う。死に戻りが無ければここまでは戦えなっただと思う。この時だけはこの力を授けた奴に感謝しようと思う。

時刻は既に夜だろうか。月と星々が俺らの戦いを見守る中、俺は短剣を振りかざした。

「イカロス!!!」



そして俺は遂にミノタウルスを死の淵まで追いやう事に成功した。全身から血を流しながら倒れるミノタウルスに俺はとどめを刺すことにした。

テーセウスの短剣を握りしめて振りかざす。喉に刺さった短剣はみるみる内に血に染まり、俺の着ているボロ布も血だらけになった。終わった。遂にミノタウルスとの長き戦いが終わった。だが、こんな所で達成感など感じている場合じゃない。最後奥に落ちていた羽を拾って帰るとしよう。ふと奥に月夜に照らされて銀色に光る何かを見つけたが、俺には関係ないだろう。なんせ羽は集まった。後はダイダロスに渡すだけでイカロスは俺の復讐は成し遂げられる空へと羽ばたけるのだから。

帰ろうとした俺はミノタウルスの指がピクリと動いたのを逃さなかった。

思わず避けようとするが、ミノタウルスの手によって俺の足首は握り潰された。そのまま立ち上がり、床にいる俺を睨んだ。

痛みに思わず呻くが、ミノタウルスはそんなの御構い無しに俺の頭を握る。

何が足りない……？俺は本物のテーセウスに代わってミノタウルスを退治出来たはずだ。いや、死んでなかったと言うのだろうか。それにしては最大の間隙があった時に攻撃を仕掛けてこなかった。仮に後々躲されるリスクを考えたら、羽を拾っている間に殺すのが妥当な判断と言える。死んではいなかったが、動くこともままならず最後の力で俺を握り潰したのか？いや、それならば立つ気力もないんじゃないか？生憎俺にはミノタウルスの事はよく分らないが。

いや、足りないものは確かにあった！翼を作る際、ダイダロスが一つだけ持っていなかった。必要不可欠な物を。

それは……

水っぽい音と同時に、一つの遺体がラビリンスの床に落ちた。

もしそれが怪物の所為ではないとしても

715 周目

生け贄の英雄テーセウスは、脱出不可能のラビリンスを脱出した。その理由はミーノース王の娘 アリアドネーから貰った糸玉を使う事でラビリンスから脱出する事が出来たのだ。だがその後アリアドネーとテーセウスは結局結ばれることはない。アリアドネーに恋した他の男が攫い、テーセウスは見つける事が出来ず諦めてしまった。アリアドネーがその後どうなったのか、テーセウスには知る由も無い。だが、望んでいなかった展開である事は明らかである。

俺があの時最後に見た銀色の光、きつとあれが必要なんだろう。あの時俺が拾っていればもう少し結末は変わったはずだ。まあ悔やんでもしょうがない。

それにダイダロスが翼を作る上で足りないものがある。羽を蠟で固めるだけでは翼としては未完成なはずだ。

だって神話のダイダロスは小さい羽を固めて作った大きな羽を糸で結わえて翼を完成させたのだから。

最後に必要なものは、本物のテーセウスが遺したアリアドネーの糸。神話では赤色と言われていたが、銀色に見えたのは気のせいだろうか。

いや、恐らく血溜まりの中に落ちていたから赤色に染まったのだろう。本来は光に照らされて輝く銀色だったのが、血を吸って赤色に染まった。正直そんなのはどうでも良いか。糸であれば何でも良いのだ。

俺の、テーセウスのやる事は一つ。落ちている短剣を拾って目の前の怪物を殺すだけ。絶命させてテーセウスとしての偉業を成し遂げるのが俺の役目。

そして銀色の短剣を掴み、切っ先を迫る脅威に向けた。

俺は瀕死で寝転んでいるミノタウルスに跨り、銀色の短剣を喉に突き刺した。赤く温かい血が私の顔を汚した。大丈夫、どっからどう見ても致命傷だ。

これで俺が帰らない限りは起き上がる事は無いだろう。一先ずは落ち着いて大丈夫だ。

行き止まりの奥、『テーセウスは死んだ』と書いてある壁の足元。そこにアリアドネーの糸は落ちていた。やはり血溜まりに落ちていた糸は大半を赤く染め、元が赤色の糸では無いかと錯覚させるぐらいだった。

これがあればダイダロスの翼は完成する。俺はその糸を拾い、銀色の短剣を持っていない方の手で握った。血染めの糸からぽたぽたとテーセウスの血が滴る。自分の着ているボロ布が赤色に染まっていた。まあミノタウルスの返り血を浴びている時点で全身真っ赤なのだ。

刹那、倒れていたミノタウルスから光の粒が溢れ出した。その光は、まるで空に浮かんでいる月に吸い込まれていく様だった。

「イカロス！大丈夫だったか!?!」

駆け寄ってきたダイダロスが俺の体をぺたぺたと触ってきた。それを大丈夫だとあしらいつつ、俺は消えかかっているミノタウルスの側に座った。

光り輝くミノタウルスーいや、アステリオスの肉体は体の先端か



らボロボロと崩れていく。それを手で掬おうとして、指の間から光が漏れた。

ダイダロスは俺の手を引つ張って帰る様に促した。だが、俺はそれを断って座る事に決めた。

本来ならばミノタウルスと名付けられた怪物は、テーセウスの手によって殺される筈だった。だが、やって来た生け贄を皆殺しにしたアステリオスは一体どんな気持ちだったのだろうか。

ミーノース王の所為で呪いを掛けられ、妻子共に呪われた。産まれる子供には罪は無い。結局はこのミノタウルスも、俺が散々殺されたのもミーノース王が悪い訳だ。ミーノース王マジ許さん。

「ごめ……………ん」

立ち上がって帰ろうとした所で、消え逝くミノタウルスがそう呟いた様な気がした。急いで振り返るも、既に光が空へと昇った後だった。

ミノタウルスはただの被害者だった。勝手に牛の頭を持たされて産まれてきて。その所為で狂わされて、その為に閉じ込められて。そして自分が酷いことをしてしまったと思っただのか謝られた。

それが俺は憎い。俺をここまで殺すんだったらミーノース王を殺せ。何故俺、いやダイダロスまでもが巻き込まれなければならなかったんだ。本来ならばダイダロスは無傷でラビリンスを脱出出来るはずだったんだ。それなのに、それなのに！

「今更謝るんじゃない!!お前がどう言おうとも！俺は！私は絶対に許さない!!ミノタウルスも！この様に仕組んだお前ら神も！」

「お、おいイカロス？」

「絶対に殺す！何があっても殺す！刺し違えても殺す！覚悟しろ！私は貴様らが思っている程優しくはない！」

俺はミノタウルスがどんなに酷く産まれてきたからと言われても許す気はない。だって実際に俺とダイダロスを殺したのはミノタウルスだ。世界じゃない、神でもない。こいつ自身の斧だ。だから謝れる筋合いはないし、もし謝られたとしても俺はテーセウスの短剣を喉元に突き刺すだろう。

俺の、私の復讐はまだ終わっていない。そもそもの根源であるミーノース王に恨みはないが、この様に仕組んだ神を殺さなければならぬ。

俺はテーセウスの短剣を握りしめた。爪が手のひらに食い込んで血を流し、その血はラビリンスの石畳へと流れて行き、奥の血溜まりへと混じった。

ダイダロスが手を引っ張ろうとする。手に持っていた糸をダイダロスへと渡し、俺はそのごつごつとしたお父さんの手を握った。

8周目で落ち着く事が出来た窪みに着くと、ダイダロスは着くなり作業へと戻って行った。

俺は短剣を地面に起き、満天の星空を眺めながら寝そべる事にした。未だにどれがどの星かは分からない。

遂に俺のイカロスとしての生活は終わりを告げる。後はダイダロスが翼を完成させて終わりだ。俺が翼を付けて、神を殺すだけだ。

……少し体が悲鳴を上げているのが分かる。体の節々がぎしぎしと軋んだ。ミノタウルスとの戦闘は苛烈を極めたものだった。一つ間違えれば死亡の世界で、たった一本の短剣を持って巨躯な怪物に立ち向かう。それは他者から見たら無謀に見えただろうし、勿論俺も少しは無理だろうと思っていた。

戦っている間に集中力が切れたりもした。だが、ミノタウルスの目を見る度に蘇るのだ。あのお父さんを殺した時の怒りが。あの時の復讐心がふつふつと湧いてきて、気がつけばテーセウスの短剣を振りかざしていた。

だがそれも遂に終わったのだ。俺の仕事は終わりだ。俺の、テーセ

ウスとしての仕事は終わったのだ。その事に自分に対して激励をしつつ、俺は目を瞑った。

起きた時には俺はいないだろう。俺の記憶を持って、俺の憎悪を持ったイカロスが。その天へと人間が復讐するという傲慢をもって神を殺してくれるだろう。

俺が俺では無くなってしまふ事に少しの恐怖感と、神へと復讐できる幸福感が混ざり合う心情の中、俺はその意識を深い闇の中に落とした。

そしてその復讐は燃え盛る

「やつとだーやつと翼が出来たぞー！」

お父さんの叫び声と共に、私はその意識を覚醒させた。空にはいつも通り輝く太陽が浮かんでいる。

寝ぼけ眼を擦りながらお父さんの持つっている翼に目を移した。

それは正に伝説の石工と謳われただけはある出来栄えだった。白い羽を集めて作られた白翼は今にも空へと羽ばたきそうにしている。翼からは背負える様に赤い糸が付けられていた。だが、流石にこれを付けた所で本当に空へと飛べるとは到底思っていなかった。

お父さんは翼を私に渡した。それを掴み、かなり重い事を確認して一旦地面に置いた。

「おとうさん、いともらえる?」

「糸か、何に使うんだ?」

首を傾げながらも渡してくれたお父さんに感謝の気持ち述べつつ、私は落ちている短剣を着ているボロ布に括り付けた。しっかりと落ちない様に何度も何度も結ぶ。

きちんとかくつ付いた事を確認して、私は翼を背負う事にした。

「いいかいカロス。ちゃんとわしの後をついて来るんじゃないやぞ? 翼は蠟でくっ付けておる。太陽にあまり近づくと溶けてしまうからな」

「わかった」

にっこりと笑ったお父さんに少し罪悪感が湧いた。

お父さん、ごめんなさい。今日、私は死にます。この身を焦がしても、その神に復讐しないといけないのです。助けてもらったこの身を復讐などに使うのはいけない事なのは分かっていますが、それでもしなければならぬのです。

俺は私だから。

飛ぼうという意思を込めると翼はまるで生きているかの様に畝り、そして羽ばたき始めた。

ラビリンスには既に人影はなく、ひらひらと舞い落ちる白羽だけが

その場に残っていた。

空へと羽ばたくと忽ち高くへと上り、周りにある建物や王城、そしてラビリンズですらも小さく見えた。

「すごい！」

「だろー！イカロス、ちゃんとわしの後を追うんじゃぞ！地面すれすれでもない、空高くでもない。今ぐらいの丁度良いぐらいの高度を飛ばんじゃ！」

風を切りながら羽ばたくのはとても気持ちがいい。寧ろこのまま復讐などやめて、お父さんとずっと一緒に飛んでいたかった。しがらみのない、自由な大空へ。

だけれども、このままでは修正は終わらない。私が太陽へと羽ばたいて、傲慢の象徴として飾られて死んで。それでやっと修正が完了するのだ。恐らくこのまま地面へと降りても、神はそれを許さないだろう。だってそれは神々の想像していなかった事なのだから。

ふつつつと復讐の炎が私の中で燃え上がり始めた。

どうして私は空を飛び鳥の様に自由ではないのか。神々の思うがままに動かされて、大切な人を殺されたりなんかして。そして自由な時間も与えられずに、今の身は滅ぼうとしている。

私は高度を大きく上げた。お父さんの声が聞こえてくるが、それももう2度と聞けないだろう。一筋の涙が頬を伝った。

だめだ、甘えるな。それでは俺私がした事が全て無駄になる。私はこの復讐心を神へとぶつける。それなのに、それだけなのに。

頬を伝う涙は止まらなかった。

ぼろぼろと溢れるそれは、下方の海へと消えていった。

ああ、どうしてこんなにも悲しいのかな。

単に神が怖いから？違う。

お父さんと離れてしまったから？違う。

私を助けてくれたお父さんに、愛をくれたお父さんに恩返しが出来ていないからだ。たったそれだけだった。

目覚めた時も私を最初に気遣ってくれた。

何時も私を助けてくれた。

命なんか惜しくないよ、ミノタウルスにぶつかっていった事もあった。

……死んだとしてもその手はミノタウルスの足を掴んでいた事もあった。

時には転んだり迷惑をかけてきたけど。そう私は呟いて、泣きながら笑った。

腹をくくれ私、もう未練はないだろう？そして腰に括り付けてあった短剣を抜き、その切っ先を太陽へと向けた。

私の翼から炎が上がる。きっとそう遠くない未来に、私は急降下して本当に意味での死亡を経験するだろう。

そうだとしてもこの身は震えてなどいない。私はここで神を殺し、その首をお父さんへの恩返しの商品として持って行こう。そう考えると自然と力が湧いてきた。

燃え盛る翼を羽ばたかせながら、私は叫んだ。

「神が……この身を傲慢の象徴として殺すというのなら！私はそれを受け入れよう！それが運命というのなら、私は笑顔を持ってそれを受け止めよう！」

ダイダロスの、お父さんの作った羽が落ちて行く。赤い糸が吸っていた血が溢れ、蠟を赤く染めた。

「だがしかし！私のお父さんまでもを殺した！神は私だけではなくお父さんを殺した！私はそれが許せない!!!」

ボタボタと垂れる蠟は、羽からは溢れ出す血の様に見えた。

それでもイカロスには叫び続けた。

「私は今から貴様ら神へと復讐する!!! 覚悟しろ!!! 刺し違えても殺してやる！許しを乞いても殺してやる！貴様ら家族全て殺してやる!!! 私の復讐心がそんな炎で焼けない事に怯えながら!!! 私に殺される!!!」



ら。その横に一筋の涙を添えて。  
だけれどもまだまだ物語は終わりません。

次なる話は人理の修復劇へと。



## 後書きと伏線の解説（？）

事前にも告知した通り今日は後書き回です。話はこれっぽっちも進まないのです、F G O編が見たいと言う方はもう少し待っていただけると幸いです。明日には投稿したいです……

本編はいかがだったでしょうか。文が拙い所もあり、かなり皆様にご迷惑をお掛けしたと思います。そして誤字報告もありがとうございました。かなり大きなミスをしていたので、訂正していただいても助かりました。添削している筈なのに気がつかないとは……

今回はリゼロ等でお馴染みの死に戻りを加えた小説を書いて見ました。前にも他の二次で手つけたことはありましたが、完結には持つて行けてなかったのも、今回は無事に完結出来て私も嬉しいです。文の上手い下手は置いといて。

当初は死に戻りにする予定は全く無く、とりあえず神話の登場人物になったんだからラビリンスで無双しようと思っただけ。だけれども、書いて見たら全く面白くない上に話が続かない。それで弱くてもいつか勝てるように死に戻りにしたら今のクオリティーになりました。

今作は神話を知った上で読むと面白く読めるかと思えます。ダイダロスの台詞とか神話から抜粋しただけだし、テーセウス関連の所なんかちよつとした知識だけで色々と推測出来るようになってるように書いた筈……

先ずはさりげない伏線の解説から。

くイカロスが女の理由く

イカロスはその翼を広げて飛んだ時、地上にいる人々からは神の使徒だと思われたらしいです。男天使2人で飛ぶ光景とかあんまり見たくなかったです。天使Ⅱ女という偏見が産んだTSでした。それに可愛い女の子の方が書いてて楽しいよね。うん、可愛いは正義である。

『テーセウスは死んだ』の血文字

結論から言えばテーセウスは死んでません。

元々イカロスが死に戻りを繰り返してミノタウルスを殺したのは神話の修正のため。テーセウスがミノタウルスを殺していれば、イカロスは死に戻りを繰り返す必要はなかった。

でも神話の修正にはテーセウスが殺す必要はないのです。誰かが殺して、その後にテーセウスが殺したと言えば、歴史上はテーセウスがミノタウルスを殺したという事実になる訳です。

テーセウスは自分が退治したとミーノース王に言っ、それを誰かになすりつけようとした。

そして神話を見直すと、テーセウスに恋したアリアドネーは結果的に行方不明になっています。

神話の修正とは神話通りになればなんでも良い。そう解釈すると、アリアドネーの失踪が神話の修正に必要でした。

テーセウスはアリアドネーを殺した。いや、殺す必要があったのです。

作中でイカロスは落ちていた糸が血に染まって赤くなったと言っていました。それはつまり元は赤色ではなかったという事。

神話ではアリアドネーの糸は赤色だったと伝えられています。つまり糸は赤色である必要があったという事。

ラビリンスに入った生け贄の中で、アリアドネーをラビリンス内に連れ込める人かつ神話上でもラビリンスに入って生きている人。つまりテーセウスがアリアドネーの糸を赤く染めた。つまりは殺した人という事になります。

その後『テーセウスは死んだ』と書き、ラビリンスから脱出した。もちろん脱出した時に糸はラビリンスに落として。

これテーセウス編も書いた方がいいかな。イカロスと同じく神話の修正を求められた1人として。そっちの方がより理解出来ると思うんだ。

あ、なんか偉そうに上で語ってますが、多分私にも気がつかない矛盾点があるかと思えます。その場合は深く追求せずに心の中で黙し

てください。

以上伏線の解説でした。他に説明していない伏線あったっけな。覚えてないです。言ってくだされば解説すると思います。

それじゃあ私はF G O編をのんびりと書いてきます。

投稿は明日出来ると思いますが、万が一の場合はT w i t t e r等でお知らせすると思います。同名義でツイートしていますので。

それじゃあ次のお話でお会いしましょう。

活動報告にてアンケートしていますので是非。

## F GO 日常編

わんわんお

「うう………」

一人の少女が扉の前でぶるぶると震えていた。

扉には『ジャンヌ・ダルク・オルタ』と丁寧な字で書かれていた。他の扉にも同じ様な字で書かれていたので、一人が全て書いたのだろうと察した。器用な人がいるのだと少女は思う。

さてさて、ここで少女が震えている理由を考えてみよう。

ここは標高6000メートルもの雪山の地下に作られた地下工房。人類継続保障機関 通称フィニス・カルデア。南極大陸に作られた地球最大にして唯一の人理観測所だ。

成る程、だから寒くて震えているのか。とはならないだろう。実際にカルデア内には温かい風が充満している。ここにはサーヴァントだけでなく、普通の人間もいるからだ。勿論マスターはその枠には入らないと少女自身は思っている。

そして少女も英霊、つまりはサーヴァントの枠に入る。人間とはかけ離れた身体能力を持つ、言わば怪物だ。

真名をイカロスという。ギリシャ神話内の登場人物で、太陽に近づき過ぎたため墜落した傲慢の象徴として語り継がれている。

だがその正体も明かしてみればごく普通の少女だった。ベージュ色の頭髮に、赤い目をしている。強いて言えば彼女の身に纏っている物がおかしいぐらいだった。

ボロボロの布一枚。足には鉄枷。肌も所々擦り傷だらけで、これがデフォルトなのだ。マスターにも心配されたが、治らない傷はどうしようもないと割り切った。心配されようが、サーヴァントは全盛期の姿で召喚される。この奴隷スタイルが彼女の全盛期であったという

事だ。

因みに彼女の全盛期とは父親と二人だけで迷宮にいた時の事であって、逆にそれ以外の記憶がない。

つまるところイカロスは、

「うう……こわい…………！」

コミュ障であった。

1

イカロスは召喚された際に、自室となる部屋に連れて来られた。

綺麗な部屋だと思ったのも束の間、マスターと同じ復讐者同士親睦を深めようと言われて、挨拶回りに行くように言われた。聞いた時こそ頑張るぞという気持ちで一杯だったが、マスターは忙しいらしく一人でも行けるよね？と問われて勢いで頷いてしまった。

それが運の尽き。イカロスはこうして部屋の前で一人でふるふる震えていた。

余談だがサーヴァントはそれぞれクラス毎に部屋の場所も違う。だから復讐者であるイカロスの周りの部屋は同じ復讐者という訳だ。

右隣からは常に高笑いが聞こえてくるし、左隣の部屋に真っ黒い人が入ってくるのを見てしまったイカロスは、向かいの部屋『ジャンヌ・ダルク・オルタ』と書かれている部屋の主に声を掛けることにした。  
「……………よしー！」

そうだ、自分は怪物を退治した英霊じゃないか。勇気を振り絞ってコンコンとノックする。

が、出ない。よく見ると、ドアノブにかかっていたプレートには『外

出中』の文字が。緊張して損じた気分だ。へなへなっと床に座るイカロス。

そして湿っぽい感触がした時、イカロスは全力で前方に飛び跳ねた。そして空中で短剣を抜き、くるりと背後を向く。

そこにいたのは首無しの男に、青い狼だった。先程の湿っぽい感触は恐らくだがこの狼に舐められたのだろうと思った。

ミノタウロス以外の怪物を始めてみるイカロスは、若干怯えながらも銀の短剣の切っ先を狼に向けた。

「グルルル……!!!」

唸る狼。

怪物狩りは自身の領分ではないかと思いついたところで、

「えっ?」

首無しの男が土下座をしてきた。

その奇妙な行動に驚きを隠せないイカロス。

首無しの男はイカロスの手を引っ張って走り出すと、とある扉の前に立ち止まった。

何事かと思っていると、必死にある所を指差す首無し男。イカロスがそちらに目を向けてみると、男が言いたい事が分かってきた。

「へしあん………ろぼっ!」

そこには『ヘシアン・ロボ』と書かれていた。察するにこの男か狼の名前であろう。

こくこくっ!と頷く首無しの男。どうやら彼が言いたいのは同じ復讐者であり、敵ではない事を証明したかったのだろう。現に狼は廊下の端でちよこんと座っていた。人が乗れる程の大きな狼が座っているのは何ともシニールな絵面だ。

そして首無しの男は懐からクッキーの入った袋をイカロスに渡すと、立っていた狼の背中に飛び乗った。そしてイカロスの方へ手を伸ばす男。

それを一緒に乗るか?という風に解釈したイカロスは、男の手を掴んで狼の背中に飛び乗った。ふかふかとしていて気持ちいい。青と白の混じった毛並みに載っていると、どうしようもない暖かさがイカ

ロスを襲う。

「ふわあああ………」

跨がれたらもつと気持ちいいと思う。だが足枷の付いているイカロスは、腰掛けるぐらいしか出来ない、無念である。

「どこに向かっているの？」

イカロスがそう尋ねると、首無しの男は困ったように首を傾げた。どうやら話せないらしい。必死にジエスチャーをしているが、一向に伝わらない。

どうしたものかと二人が首を傾げていると、突然地鳴りの様な音が響いた。

イカロスが首無しの男をみると、彼は腹を抑えて笑っている様だった。余程面白かったのかバシバシ狼の背中を叩いている。

「おなかへつてたんだ……」

地鳴り、ではなく狼のお腹が鳴っただけだったらしい。そしてイカロスはそこで彼らが食堂へ向かっているのだと初めて理解した。成る程、食堂だと分かれば彼の先程のジエスチャーも何となくだが理解出来る。あれは狼がご飯を食べているジエスチャーだったのか。

イカロスがくすりと笑うと、狼は恥ずかしそうの体を左右に揺らした。その反動で落ちた首無しの男を見ると、スピードをぐんぐん上げていく狼。

「わっ……はやいー！」

イカロスも掴まっていけないと振り落とされてしまいそうだ。風を切って廊下を走る狼。そしてみるみるうちに小さくなっていく首無しの男。

そして食堂という立て札を見つけ、その前で急ブレーキをかけた狼。

「あうっ！」

落とされたイカロスは、腰をさすりながら立ち上がった。

良い匂いの中にクッキーの仄かな甘みが混ざっている。鼻は特別良いと言うわけではないが、何となく分かった辺りクッキーが相当美味しいものであるとイカロスは判断した。

「またのせてくれる?」

食堂に入っていく狼『ヘシアン・ロボ』に尋ねるイカロス。

狼は「ガウツ」と短く吠えると大きな前足で扉を開け、そして食堂に入って行った。

そして走ってきた首無しの人にクツキーのお礼を言い、狼が入った様に伝える。

グツと親指を立てた首無しの男を見送りつつ、クツキーの作った人にお礼を言おうとイカロスは食堂に入って行った。

尚、『ジャンヌ・ダルク・オルタ』については忘れていた模様。



## しろくろジャンヌ

食堂に入ると多くのサーヴァントが食事をしていて。食事はサーヴァントにとつては不必要なものであるのだが、娯楽という一面があるからだろう。わいわいと賑わっている食堂に目を輝かすイカロス。

だが、どうしたら良いか分からない。この食堂の使い方も、そしてそれを聞く友と呼べる様なサーヴァントもない。ヘシアン・ロボもよく見たら食堂の端で食事をしていた。彼の食事の邪魔をするのは良くなさそうだ。なんというか、頭からがぶりと食べられる様な気がした。

そこでイカロスは手にしたクッキーの匂いを辿れば、クッキーの作成者に出会えるのではないかと考えた。純白の聖女が小声で「頑張れ！」と言っていたのはまた別の話である。

迷宮よりかはずっと攻略は楽そうだとイカロスは思った。というよりか怪物が跋扈する迷宮がずっとハードなだけだ。サーヴァントも敵対しているわけではないし、寧ろ温かい視線すら感じるまでである。イカロスがふと向くと、多くのサーヴァントがこちらを見ていたのだから。

その視線にびつくりしながらも、まずはお礼だ。クッキーを作ったのは誰なのか。

そしてイカロスが立ち止まった先には、一人の男がいた。真っ白な頭髮に褐色肌の男。赤いエプロンがやけに似合っているそのサーヴァントは、イカロスの姿を見るなり作業を止めた。

「ふむ、私に何か用か？」

中腰になり、イカロスと視線の高さを合わせてくる男。

イカロスはわたわたとしながらなんとかお礼を言おうと試みるが、ぱくぱくとしただけで声が出ない。

イカロスは「うう……！」と小さく唸ると何処かへ走り去ってしまった。そしてそれを見送った男 エミヤは首を傾げながらも再び

作業に戻る事にした。追ってみたみたい気持ちも山々なのだが、騎士王が皿を持って此方を睨んでいたのだから。

「話には聞いていたが、あれが復讐者のサーヴァントか……?」

「アーチャー、ご飯を所望します!」

「ああ、待っている」

ぴこぴことアホ毛を動かしている騎士王を見て、エミヤはフツとニヒルに笑った。

さてさて場面は移り変わってイカロス。

多くのサーヴァントが利用している食堂で走ったりなどしたら、勿論誰かにぶつかるに決まっている。

「あうっ!」

イカロスはぶつかり、その反動で床で一回転。

目の前を見ると、ぶつかられたであろう被害者がイカロスを見下ろしていた。

すらりとした白い肌をした美脚。ジャージ素材の短パンを履き、『ふくしゅう!』と書かれたTシャツを着たモデル体型の美少女。

マスターから聞いた特徴と一致する。些か服装がダサイのはさておいて。

「じゃんぬ……?」

「……何よアンタ……つてもしかして最近召喚されたサーヴァント?」

こくこくと頷くイカロス。察しが良くて非常に助かった。

「ふーん」と値踏みする様な目線を向けてきた少女に、かたかたと怯えながらもイカロスは持っていたクッキーを差し出した。これで一緒にお茶でもしないかという算段であった。

それがどういう意味なのか図りかねた少女 ジャンヌ・ダルク・オルタは、とりあえずイカロスの手を引いて近くのテーブルに座った。「で、私に何か用？」

「えっと……あいさつしたくて……」

「あらそう。ご丁寧にありがとうございます」

……会話が続かない。

じんわりと涙が溜まっていくのを見たオルタは、溜息一つ吐くと何処からか紅茶を持ってきた。

「紅茶は飲める？」

「うん……」

カップを持って「ふーふー」としているイカロスを見て、オルタはクスリと笑うとイカロスが持ってきたクッキーを皿に出した。

バターの良い香りのするクッキーだ。それぞれ味が違うのか、チョコチップが混ぜ込められていたり、二色のクッキーもあった。黒と白のクッキーだったが、オルタは作った主の腕前を鑑みるに焦げたのではなくチョコ味なのだと踏んだ。

「……ほら、アンタがまず食べなさいよ」

「え、でも……」

「いいから！早くしないと私が全部食べちゃうわよ？」

ギョツとするイカロス。慌ててクッキーを口の含み始めたイカロスを見てニヤニヤしていたオルタだったが、苦しそうな表情を浮かべ始めたイカロスを見て今度はオルタが慌て始めた。

「ちよつ！アンタ口に含みすぎなのよ！ほら紅茶飲んで！」

「むぐぐ……！」

「ああもう……！口の周りに食べカスが付いてるじゃない！」

取り出したハンカチでイカロスの口元を拭うオルタ。

そして後ろで見ていた聖処女に復讐の炎が飛んだ。轟々と燃え盛る炎を旗で受け止めてにつこりと笑うジャンヌ・ダルク。

「ああもう！さつきから視界の端でニヤニヤうるさいのよ!!」

「成長しましたね……オルタ」

「アンタは私の親か！」

やり取りを見て困ったそぶりのイカロスの腕を引き、何処かへ向かうオルタ。

イカロスはなんとかクッキーを飲み込むと、食べカスの散った皿を持ってオルタに引かれていった。

なんで？と言わんばかりに首を傾げていると、立ち止まったオルタが溜息を吐いた。

「なんでって……アンタ、お礼が言いたかったんじゃないの？さつきウロウロしてたのを見かけたのよ」

どうやらオルタはイカロスが食堂に入った時から見ていたらしい。あの視線の中に彼女のものがあつたという事だ。

そしてオルタはエミヤと話そうとして逃げた所も見ていた。手にはエミヤ製であろうクッキーを持っていたことからオルタはお礼を言いたかつたのではないかと推測した。

こくと頷いたイカロスの手を再び引いていくオルタ。

「それに食べてからお礼言いなさいよ。美味しかったのが一番のお礼になるでしょ」

「うん……！」

笑顔に戻つたのを確認して頷くオルタ。やっぱり聖処女の視線を感じるが、もう無視しておこう。後で焼けばいいか。

キッチンに着くと、未だにエミヤは騎士王の食事を作っていた。フォークとナイフを持った騎士王がじっとキッチンを睨んでいるのが印象的だ。

「オルタか。どうした……って」

「この子が言いたい事があるんだって。ほら、さつきと言っちゃいなさい」

オルタに背中を押されてエミヤの前に出るイカロス。

そして勇気を振り絞った様に一言。

「ありがとう……」

「ああ、どういたしま

エミヤが言い終わる前に走り去ってしまったイカロス。その後ろ姿をエミヤは微笑ましそうに眺め、オルタは溜息を吐いた。

「いい子だな」

「ええ、でもあの子も復讐者よ」

悲しそうに呟くオルタ。彼女は自分がどんな存在であるか、復讐者の持つ願いがどれだけドス黒いものが分かっているからこそその表情だった。

エミヤはフライパンの上でハンバーグをひっくり返しながら言う。

「だからこそ、あの子が暴れた時に止めるのが役目だろう？」

「もちろん。マスターにも言われていますし」

ジャンヌ・ダルク・オルタはマスターから言われた一言を思い出していた。

彼女はとびつきり優しいサーヴァントであり、だからこそ反動が激しいと。彼女が復讐の炎に囚われた時には、同じ復讐者として助けて欲しいと。

「……全く、アウエンジャー復讐者に頼む事ではないでしょう。ねえ、マスター」  
オルタはイカロスから貰ったクッキーを齧った。仄かな甘みが口の中に漂う。

彼女がイカロスの復讐者としての面を見るのは、そう遠い話ではないかもしれない。

## イカロスの炎

召喚されて少し経ったある日。イカロスはいつも通りのんびりとカルデア内を歩いていた。

というのも大して話すサーヴァントもいない上に、今日はヘシアン・ロボもオルタも忙しいらしく、部屋に行った時には既に外出中であつた。恐らくマスターと一緒にレイシフトとやらに行っているのだろうと適当に推測。

まだカルデアに来たばかりのイカロスに友と呼べる様なサーヴァントはあまりいない。巖窟王とやらも適当に挨拶を交わしただけで、それ以降は話していない。同じ復讐者とはいえ、必ずしも常に話すかと言われれば答えはノーである。尤もイカロス自体あまり彼の事が得意ではないのだが。

イカロスはそういえばと思い、壁を摩った。

ここは若干であるがイカロスがいた迷宮ラビリンスに似ている。なんとというか、この風景の無機質な感じが迷宮を彷彿とさせた。

忌々しい記憶が蘇るが、イカロスはそれをぶんぶん頭を振る事で解消した。そうだ、ここはイカロスの知っている迷宮ではない。あの様な怪物もいないし、お父さんもいない。優しい人がいて、温かいマスターがいて。食べるご飯もあつたかいし、水すらない迷宮とは大違いだ。

「よし……！」

イカロスは聞かされていたレクリエーションルームに向かう事にした。聞けば多くのサーヴァントが其処で遊んでいるとのこと。沢山のサーヴァントと友達になるためにここは一念発起する場面だ。

そして握り拳を作り、気合いを入れたイカロスの視界に見慣れたものが入ってきた。

白い蠶の怪物。ここにいるはずがないのに。あいつは人殺しの怪







イカロスが見た女神の笑い。それは決してイカロスを見て嗤ったのではない。

「それでも、あんな幸せそうな顔を見たら殺せない……………ツツ!!!」

彼女を肩車しているアステリオス。彼との会話に対して笑っていたのだ。

だからイカロスは残る僅かな理性で自分の掌に短剣を突き刺した。文字通り、彼女の中に眠る怪物を殺すために。

自分を殺した怪物が、別な人と笑っている。そしてそれを殺してしまふ様な事があれば、イカロス自身も怪物ミノタウリスになってしまふ。復讐を誓った彼女だからこそ、それだけは許せなかった。

「…………大丈夫よ。アンタには私が、私たちがいるわ」

「うう…………!!!」

ぼろぼろと泣くイカロスをオルタは抱きしめていた。

子供の様に胸で泣きじやくるイカロスを見て、オルタは顔を歪めた。

あれが彼女が抱える復讐。自身の抱えるフランスへの復讐とは違ってスケールは小さいが、それだけ抱える思いは大きい。

血涙は既に収まっており、透明な涙が廊下に溢れた。

「アンタは少し優しすぎるのよ…………」

オルタはイカロスの翼を撫でながら言った。

「私達は復讐者なんだから」

イカロスの泣き声だけが廊下にずっと響いていた。

オケアノス編  
レイシフト

——長い長い夢を見ていた。

そう独り言ちた所で、ふと自分の居る場所が英霊の座ではない事に気がついた。

はて、誰かの召喚に応じたのだろうか。記憶にないと言えば正しいのだろうが、自分が召喚に応じなければ、きっと召喚される事もなかっただろう。そう思い、腕をぐぐつと伸ばした。伸びきった背中からポキポキと音がする。

長い夢を見ていたと思う。あの迷宮での出来事。忘れるはずのない自分の呪い。そして狂気に似た自分の憎悪。

まるで走馬灯の様に思い出していた。だが、それも終わりの様だ。外から声が聞こえる。激しい声だ。誰かを罵り、誰かが叫び。その声に応じるかの様に誰かが悲鳴をあげた。

そうか、これはきつとあの惨劇に似た様な事が起きている。誰かが傷つき、誰かが死んでいる。それでも鳴り止まない音、気が付けば不思議と手はドアノブに近付いていた。

あの忌々しい光が降り注ぐ外へと。いま、舞い降りる。

あなたは現在進行形で慌てていた。

レイシフトに成功し、どんな場所なのかーと思った矢先、矢鱈ガタイの良い男達に囲まれていた。

隣では後輩のマシユが、彼女の体に似合わない大盾を構え、青白いモニターではドクター・ロマンが頭を下げていた。

だが、状況が好転する筈もない。サーベルを構えた男達ー海賊が迫る。

「先輩ー」

ーああ、戦おう。マシユ!

令呪でサポートする事も念頭に入れ、あなたは礼装によるマシユの強化を行った。

マシユが突貫する。海賊達を薙ぎ払い、あなたは船の端まで寄るようにマシユに言った。

疑う事もせずに頷いた彼女は、あなたを背にしてすぐさま端まで寄った。背後には古代の波が轟々と音を立てている。落ちれば命はないだろう。

それでもあなたがそう考えたのには理由があった。

勿論自分が足手纏いになるのを防ぐ為である。四方八方囲まれた状態ではマシユも碌に戦う事は出来ない。なら、攻められる方向を減らせば良い。後は一人ずつゆっくり倒していけば、体力の高いマシユが勝てる。

それが生身の人間だけならの話だが。

『気を付けてーサーヴァント反応だ!』

ドクター・ロマンが叫んだ直後、突然船の扉が開いた。

ロマンの叫び声に気を引き締めるあなたとマシユ。海賊ならまだしも、サーヴァントはそういかない。相性によつては最悪死ぬかも知れない。そんな事実が迫っていたが、あなたは常に最善を尽くすだけだ。そう頭を回転させ、心に炎を灯した。

ドアを開けて飛び出したのは、布を被ったサーヴァントだった。その姿はボロボロの布に隠れて見えない。

が、マシユの眼前にすぐ様迫った所を見るに、俊敏性の高いサーヴァントの様だ。

——相性が悪い……!!

そう判断を下したあなたは、礼装によるガンダムも視野に入れて動く事を決めた。

一瞬止める事が出来るガンダムだが、きつと役に立つだろう。

「はあああああああつっ!!!」

マシユの盾が唸る。振るわれた盾は、布のサーヴァントが持っていたナイフにぶつかり、甲高い音を立てた。

拮抗。その様に見えたが、マシユの方が僅かばかり押ししていた。

そのまま押し返した彼女は、空中でもう一押しと言わんばかりに布のサーヴァントを盾で殴った。

殴られた布のサーヴァントは、後方に一回転宙返りすると、銀のナイフを再び構えた。

「ちよつと待ってくれ!」

が、その直後一人の海賊が慌てて飛び出して来た。

「俺たちも急に襲って悪かった! だけど、こいつには手を出さないであげてくれ!」

——その子は一体なんなんだ?

何か訳ありな言い方に、理由を聞くあなた。すると、苦しそうな顔で海賊は言った。

「こいつはなあ……ポロボロの姿で波打ち際にいたんだ」

「先輩……長い長い話が始まりそうですよ」

——うん、なんかさっきの戦いが嘘の様に話し始めたよ。

目に涙を滲ませて話し始めた海賊に、あなたは少し苦笑する。

マシユの言う通り、本当に長い話が始まったのはその後の事だった。

## テーセウス

「要約すると、つまりあなた達は途中の島で彼女を拾い、別な島で売ろうとしていたと」

「売ろうだなんてとんでもねえ！俺たちは、彼女に第二の人生とやらを歩ませたいだけだぜ？」

——正義の奴隷船ってなんか物語みたいだね。

あなたがそう呟いた所で、件の布のサーヴァントがやって来た。

どうやら女性らしく、『彼女』と海賊達が読んでいたことからそう察した。尤も、今現在まで顔すら見せてもらっていないのだが。

布のサーヴァントは、あなたの前までやって来ると、右手の甲をじっと見ていた。マスターの証、サーヴァントを使役している証である令呪を見ていた様だ。

ドクター・ロマンの布のサーヴァントについての見解はこうだ。

彼曰く、布のサーヴァントははぐれサーヴァントだと。オルレアンでのジャンヌの様に何らかの影響を受けて召喚された。マスターのいないサーヴァントだとか。

となれば今、布のサーヴァントが欲しているのは恐らく魔力だろう。魔力供給のされていないはぐれサーヴァントは、魔力が尽きれば消えてしまう。尽きそうになっても供給されるサーヴァントとは違うのだ。

だから、あなたは彼女が令呪を見ている理由を何となく察せた。

——えっと……

「契約して欲しい」

小さな声で布のサーヴァントが言った。

それを予想していたカルデア御一行は既に結論を出していた。

余程歪んだ英霊ではない限りは、契約して戦力を増やすのはプラスにしかならない。普通の聖杯戦争とは違い、マスターはカルデアからのバックアップがある。魔力が尽きる事は滅多にないだろう。

「……こちらこそよろしく。」

「うん、ありがとうマスター」

一瞬だけ何かか抜き取られる様な感覚が走った。くらりと体が傾くが、マシユが支えてくれた。

マシユに感謝の言葉を告げたあなたは、次に布のサーヴァントの真名を聞く事にした。名前をバラすのは弱点の露出に繋がるが、生憎周りにいるのは正義の奴隷船と名乗る海賊のみだ。強力なサーヴァントも近くにはいないし、折角だから自己紹介をしようと思ったのだ。そちらの方が信頼も得れる。

一瞬だけ戸惑う素振りを見せた布のサーヴァントは、やがて口を開いた。

「サーヴァント セイバー。真名をテーセウス。これからよろしく、マスター」

布の下の銀色の短剣が鈍く光った様な気がした。

「マスター……」

「……うん、一先ず迎撃しよう。話はそれからでも出来る。」

正義の奴隷船から降ろされたカルデア御一行は、その後森の奥からわらわらと現れた海賊達に囲まれていた。

確かにこちらは少女が二人に、武器も何も持たない男一人。海賊からすれば良いカモだ。下品な目をマシユやテーセウスに向けているのが分かる。

「……テーセウスは素早く動きながら、海賊の足を払ってくれ。」

「切りつけちゃダメ？」

「……僕らの目的は殺す事じゃない。話を聞く事だからね。」

「分かった」

こくと頷いたテーセウスは銀の短剣をしまい、海賊達の群れに飛びかかった。

俊敏性を活かし、素早く海賊に足払いをかけていく。それでも相手は負けじと切りかかって来る。テーセウスの溢した海賊。

「やあああああ!!!」

それをマシユがカバーしていく。

彼女のシールドバツシユが、海賊の背中に当たった。

声を上げて吹っ飛ぶ海賊を満足気に見送ったマシユは、次々と海賊を倒していく。勿論、大怪我などはさせない。

その間、あなたは先程ドクターが言っていた言葉を思い出していた。

ーテーセウス？

『そうだよーギリシャ神話の英雄だ!』

興奮気味に語るドクターを見るに、余程凄い英雄なのだろう。とあなたは推測した。

テーセウスとはギリシャ神話における怪物殺しの英雄らしい。

迷宮にいる怪物へと毎年生贄が捧げられている。そしてそれがミーノース王によって強要されている事を知ったテーセウスは憤慨し、父親の反対を押しきって自ら生贄を志願したという。

その後、クレータ島に着いたテーセウス。だが、そこでミーノース王の娘が彼に恋をしてしまい、こっそり赤い麻糸と短剣を渡したという。

その後、迷宮の入り口に麻糸を結び付け、糸を少しずつ伸ばしながら奥に進んでいくテーセウス。

その奥でテーセウスは迷宮の怪物 ミノタウルスと遭遇する。

他の生贄が怯え震える中、テーセウスは短剣を構え、ミノタウルスに立ち向かった。

そして見事にミノタウルスを討ち果たしたテーセウスは、入り口に付けられた麻糸を頼りに、石工 ダイダロスの作った脱出不可能な迷宮から脱出する事に成功する。

その後、順風満帆な人生を送ると思われたテーセウスだが、ミー

ノース王の娘 アリアドネーと帰路についていたその途中に寄った島にて、アリアドネーは攫われてしまう。

行方が分からなくなったテーセウスは仕方がなく船を出港させた。そして無事に故郷の島に戻ってきたテーセウスだが、帰りの際に無事であったのならば白い旗を上げると父親に言っていたにも関わらず、それを忘れて黒い旗を上げていたので、殺されたと勘違いした父親は、絶望のあまり海に身を投げたという。

そこまで話を聞いたあなたは、何とも言えない気持ちになった。

最初こそ、ミノタウルスを討伐して英雄となったテーセウス。だが、その途中で妻にすると約束したアリアドネーを失い、故郷に帰って父親を亡くした。

彼はミノタウルスを討伐すべきだったのだろうか。討伐に向かわなければアリアドネーには会えなかったが、父親を亡くすことはなかった。

『英雄ってそういうものじゃないのかな』

ドクターが言う。

テーセウスが立ち上がった理由は、ミノース王の元にアリアドネーという娘がいたからではない。

彼は、生贄が捧げられている。そしてそれが王によって強要されている。その事実には憤慨して怪物に立ち向かったのだ。

彼は二人の人物を結果的に亡くす事になってしまったが、それと同時に沢山の人を救ったのだ。

だから英雄。

だからこそ英雄。

それが英雄。

ー ドクター、テーセウスはそれで良かったのかな。

『……それは僕にも分からないよ』

ー だよね。変な事を聞いてごめん。

『それでも』

モニター越しのドクターの声が二重に聞こえた気がした。

『それが英雄テーセウスの決めた道なら。僕達に何か言う権利はないさ』



あなたはそんなドクターの言葉を思い出し出していた。  
そして戦闘を終えた彼女らの元へと走る。助けを乞う様な表情の  
海賊達を見て、苦笑を浮かばせながら。

## 森を進む

「悪気はなかったんですう……………海賊の本能なんですう」

許しを乞うような海賊達の姿に思わず苦笑するあなた。腰に手を当てて満足気にするマシユの前にいる海賊達からは先程の勢いは感じ取れない。寧ろ弱々しく涙を流す彼らに、どちらが悪者かすら一瞬忘れてしまう程だ。

とりあえずドクターと相談し、この海賊達から何か知っている事はないか聞く事にした。

「あー、そしたら姉御の方が知ってるんじゃないかと」

「姉御とは？」

マシユがそう尋ねると、突然元気になった海賊が言う。

「聞いて驚け、我らが栄光の大海賊！フランシス・ドレイク様だ!!」

ドクターとダヴィンチちゃんが海賊のキャラ立てに対して丁寧な分析をしている中、あなたはフランシス・ドレイクという名前が頭の何処かで引っかかっていた。何処かで聞いた事があるような無いような……………。

そうこうしている間に、どうやら海賊達が姉御と呼ぶフランシス・ドレイクの元へ連れて行ってくれる話になった様だ。マシユの「行きますよ、先輩」の声で我に返り、慌てて彼らの背後について歩く事にした。テーセウスは相変わらず布を被りながら、あなたの横を歩いている。

「ー太陽が苦手なの？」

「うん……………太陽に当たると痛いから」

被った布の奥から、瞳を覗かせてテーセウスはそう呟いた。

あなたはテーセウスに海賊について行くように言い、代わりにマシユを呼んだ。

「どうしたんですか先輩？」

「ードクターも良い？」

『どうしたんだい?』

あなたは海賊達に短剣を向けて歩いているテーセウスの背中を見ながら言った。

あなたの聞いたかった疑問は一つだ。それはテーセウスは本人に太陽が苦手という弱点があつたかどうかだ。先程のドクターの話を聞く限りだと、テーセウスに太陽という弱点はない。彼女の真名がテーセウスならば、太陽を嫌がるのはおかしいはずだとあなたは思う。

『そうだね。僕の調べた限りだと、テーセウスには太陽が弱点だという記述はない。寧ろ彼は船にも乗っていたらしいし、太陽があそこまで極端に苦手なら、僕ならまず乗らないけどね』

ーそれはドクターだからでしょ。

ドクターに軽口を返したあなたは、やはり彼女はテーセウスではないと思つた。

ならば、どうして彼女は自分の事をテーセウスだと名乗つたのか。分からない。が、あなたは少し彼女の事を信じきれなくなつてしまった。意識していないのにも関わらず、あなたの目には疑心の光が浮かぶ。あそこにいるサーヴァントは、契約したサーヴァントの真名は何だ。

「先輩? どうかしました?」

ーああ、いや。何でもないよ、マシユ。

心配してくれている後輩に大丈夫だと伝えつつ、あなたは森の中へと歩んでいった。

森の中は鬱蒼と生い茂っているものの、何時も海賊達が歩いている道なのか、獣道のように道が切り開かれていた。見たことも無い植物達を前に、あなたは少し心が躍る。いつだって初めて見る物には興味を惹かれるものだ。

海賊達は陽気な歌を歌いながら、森を進んでいく。その背後に目を光らせるテーセウス。

隣を歩いていたマシユは、ふと此方を向いて言った。

「先輩疲れてませんか？」

「ー大丈夫。ありがとう、マシユ。」

「というか疲れていると言ったらどうするつもりだったのだろうか。担がれでもするのか。それはないだろう……いや、マシユならあり得るかもしれない」「先輩、任せてください！」とか言つて目を爛々と輝かせながら、笑顔で持ち上げそうだ。やめよう、ちよつと恥ずかしい。「先輩、フランシス・ドレイクという人物をご存知ですか？」

「ーうーん、聞いたことはあるんだけど、詳しくはないよ。」

「では、説明させていただきます」

マシユはこほんとか咳払いをすると、得意げに語り始めた。

「フランシス・ドレイク。人類史で最も早く世界を一周を成した偉大な英雄であり、航海者。その活躍は、当時、世界の海を制覇していたスペインを撃破します」

「ー大英雄だ……。」

「はい。決して沈まない太陽と言われていたスペインを沈め、<sup>エル・ドラゴ</sup>海の悪魔と恐れられた人物。まさに『太陽を沈めた英雄』ですね」

「ー太陽を沈めた……英雄。」

あなたがフランシス・ドレイクの偉業を聞き、感嘆していると、マシユが「ですが……。」と付け加えた。

「フランシス・ドレイクは国家承認の私掠船とはいえ、海賊です。これまで出会った海賊達からして、碌な人物ではないと予想します。それでも彼は大英雄ですから、是非とも協力を仰ぎたいですね！」

「ーフランシス・ドレイクって男なはずだよね？」

「はい、確かにそうですね。どうしました先輩？」

「ーじゃあなんで海賊達は『姉御』って呼んでたんだろ。」

そんな事を考えていると、遠くの方から歌声が聞こえてきた。目の前を歩いている海賊達と同じ歌だ。陽気で樂觀的な、海賊のあり方を形にした様な歌だ。

森の中を進んでいくと、暫くして開けた所に出た。

「ーうわあ……！」

広場の様になっているそこには、海賊達が焚き火を囲って歌ってい

た。食料に困った様子もなく、酒を浴びる程飲んでいる姿も見える。後先考えずに飲んでいいのか、それとも調達のツテがあるのか。

酔っ払った海賊が、マシユを見て身体に手を出そうとする。が、マシユは何食わぬ顔でシールドバツシュし、海賊を吹き飛ばす。

一瞬静かになった広場だったが、何もしなければ危害を加えないと判断したのか、何事もなかったかの様に宴を再開した。触らぬ神に祟りなしだ。

宴の中を突っ切っていくと、一つの大きなテントが見えてきた。ここにフランシス・ドレイクがいるのだろうか。

先頭にいた眼帯の海賊が、カルデア御一行に少し待つ様に言うと、テントへと入って行った。

少しばかりだが声が聞こえる。あの眼帯の海賊の太い声と、少し囁れた女性の声だ……女性？いや、聞き間違えるはずもない。

「マシユ、フランシス・ドレイクって本当に男性？」

「の、筈です……」

マシユも耳にしたのか、自信なさそうな顔でそう呟いた。

話が終わったのか、眼帯の海賊がテントから出てきた。そして、テントの入り口を開けると、その中にいた人物を通した。

出て来たのは胸元を大きく開け、右手には酒の入っていたであろう瓶を持った人物。赤みがかかった髪の毛に帽子を乗せた「

「なんだいたい人がラム酒を楽しんでいる時に……ってこりやまた随分とキテレツなのを連れて来たね、ボンベ」

フランシス・ドレイクだった。

「フツーに綺麗なお姉さんが出て来た……!?!」